

なに、 たべたの?!

くすのき あきこ
ぶん・楠 章子 え・オカダ ケイコ

監修：岡山大学 岡崎 好秀



チュツチュツチュ。

まちのかたすみで、こんやもネズミたちのおしゃべりが……。

「さあ、はじめよう！」と、はりきっているのは、
げんきいっぱいやる気いっぱいのネズミ、
ガツガツです。



「たのしみだわあ」
めすネズミのチュリナは、
め目をきらきらかがやかせます。



「へっへっへ。こんやの おれは、すごいぜ〜」
じまんげに わらうのは、
ふとったネズミのフトッチュ。



「ぼくだって、まけませんよっ」
ひげをぴんっとのばしたのは、まえ歯ばが
すきっ歯ばのネズミ、スキッパー。



「そんなにじしんがあるんなら、じゃあ、きみから」
ガツガツは、フトッチュにいいました。
「よーし、いいかい？」フトッチュは、おお大きくいきをすいこみます。
「どれどれ」みんなは、フトッチュの口にはなをちかづけます。



そう、トマトソースの
スパゲティーです。

ぷは

フトッチュが、いきをはくと、みんなははなをくんくん。
「おっ、ニンニクですね、それから、うーん、トマトのにおいもします！」
「チーズのにおいも、するわ！」
「タバスコのにおいも、ほんのり～」
ということは、フトッチュが食べたのは……

「イタリアりょうりのレストランに、いったきたのね」
チュリナは、あこがれのまなざしを、フトッチュにむけました。
「あそこのコックさんは、ネズミが^{だい}大きらいなのに、
きみ、なかなかゆう^き気があるな」ガツガツも、かんしんしました。

「みなさん、つぎは、ぼくの ばんですよ」
スキッパーは、おもいきり いきを すいこみます。
ぷは————。



「わっ、なまぐさい〜」

「まさか、なまざかななの？」

「ってことは、きみ、みなと町^{まち}に いったのかい！」

みんなにしつもんされて、スキッパーは
はなたかだか。

スキッパーがはいたいきを、また みんなで、くんくん かぎます。

「そうですよ。おそるべき^{まち} ネコどもがたくさんいる
あの みなと町で、ぼくは、なまざかなを たべて きたんですよ」
「おおおー」ネズミたちは、それは すごいと 手を たたきました。

いきをかぐと、なにを たべてきたかが、わかります。
たべたもの のにおいが、するんです。
にんげんだと、^{こうしゅう}「口臭」といって、いやがられますが、
ネズミたちは、そうでもない みたいですね。



さて、こんどは、ガツガツの ぼんです。

ぷは————。

くんくん。

すぐに チュリナが、なにを たべたか、

あてました。

「なっとうね！」



せいかいです。ねばねばしたものを たべると、
元気がでる ときいた ガツガツは、
なっとう、おくら、やまいもが、さいきんのおきにいり なのです。



では、さいごは、チュリナです。

ぶは————。

くんくん。

「おやっ、とてもいいにおいがするぞ」
みんながうっとりするかおを^み見て、チュリナは、
ウインクしました。



「うふふふ。わたしはね、たーくさん^{はな} お花を たべてきたの」
なるほど。チュリナのいきからは、バラや パンジーや
コスモスや、そのほか いろいろな^{はな} 花の かおりがします。



チュリナは、じまんげに、ぶは————と、
なんどもいきを はきました。



すると、いいにおいに さそわれて、もう一匹のねずみが、あらわれました。
きがよわくて、いつも きんちょうしている ネズミ、ヤセッポチです。
ヤセッポチは、にんげんも ネコも、カラスも イタチも こわくて、びくびくして
ばかりで、なかなか たべものに ありつけません。だから、すごく やせています。

「おい、きみも、やってみたまえ」
ガツガツは、ヤセッポチに こえを かけました。
「どうせ、ろくなものを たべていないに、きまってますよ」
スキッパーは、つまらなそうに いいました。
「そ、そうだよ、おいらなんてっ」
ヤセッポチは、あわてて こたえました。
「でも、どんなにおいが するか、
かいて みたいわ」 チュリナは、ヤセッポチの
口にはなを ちかづけました。フトツチュも、
ちょっと おもしろそうだなと おもい、
「そうだな。もしかしたら、いままで おれたちが
かいたこともない、すごいにおいが するかも
しれないしな〜」と、はなを ちかづけます。
「う、うぐぐぐ」ヤセッポチは、
きんちょうして きました。



みんなに ちゅうもくされて、
ヤセッポチの しんぞうは、ばくはつしろう、
どきどき、どきどき。
くちなか
口の中が、かわきます。

ぷは———。

くんくん。

「ひええええ~~~~~！」

ヤセッポチのいきを かいだ ネズミたちは、
とびあがりました。
その においといったら、
とんでもないくらい、くさいのです！

「なに、たべたの?!」
みんなは、ヤセッポチに たずねました。



「な、なんにも……」

ちい小さなこえで、ヤセッポチは こたえました。

「うそだろう。こんなに くさい たべものって、なんなんだい？」

ガツガツは、ヤセッポチに せまります。

「だ、だって……」

ヤセッポチは、こまってしまいました。

ほんとうに、きのうから

なにも たべて いないのです。

「ずるいですよ。おしえてくれても

いいじゃないですかっ」

スキッパーは、ヤセッポチを にらみました。

「ど、どうしよう……」

ヤセッポチは、ひやあせが できました。

そして、くち なか口の中は、さらに からからに かわいてきました。



と、そこへ、つえをついた とし年よりの
ネズミが やってきました。

「みんな、ヤセッポチは、うそなんか
ついておらぬぞ」

とし年よりネズミは、おしえてくれました。



「ストレスや きんちょうがつづく、

だえき^でが 出にくくなり、

いつも くち なか口の中が かわくようになる、

それを、ドライマウス というのじゃ。

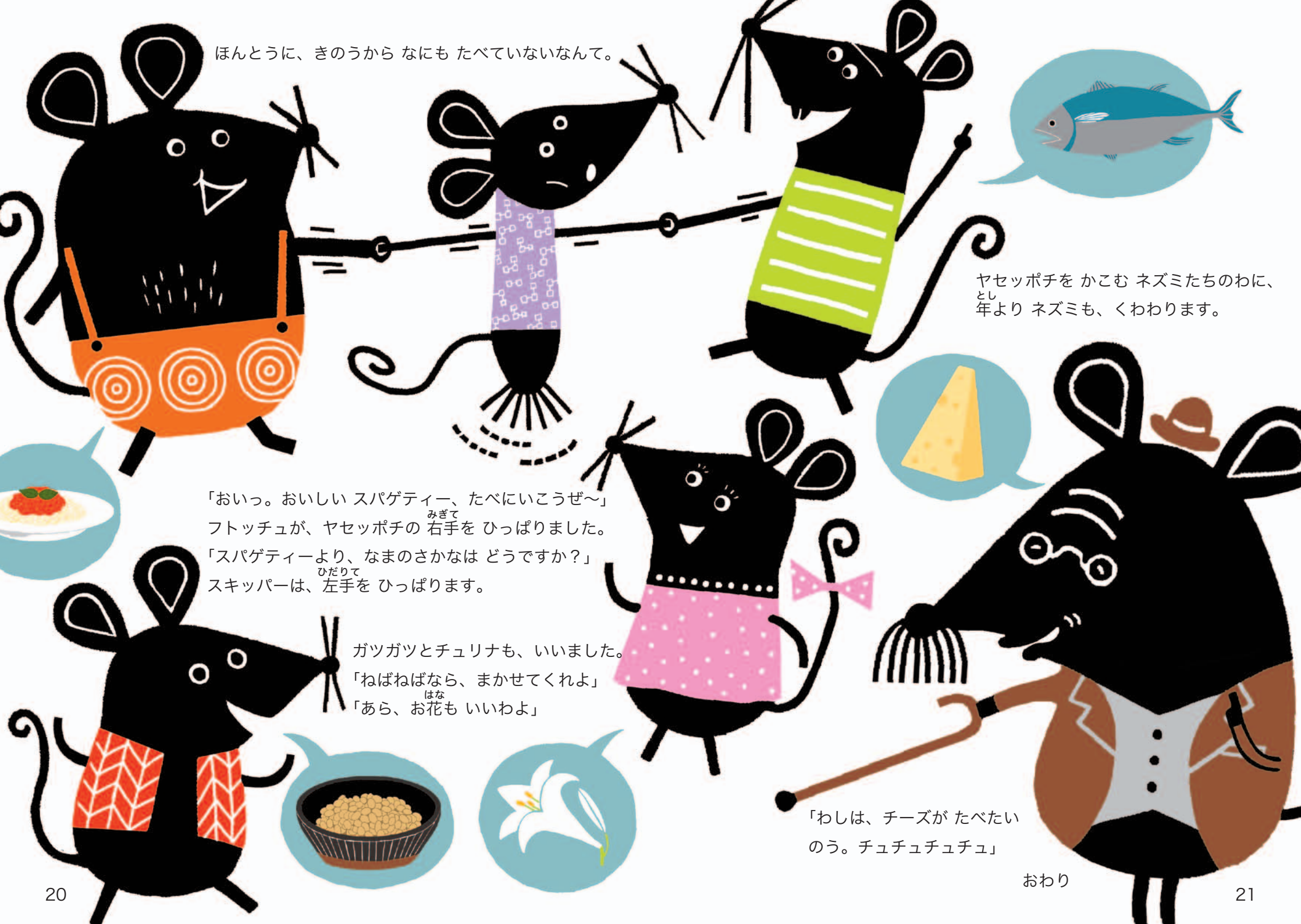
ドライマウス になると、むし^ば歯になりやすく、こうしゅう口臭も ひどくなる。

ヤセッポチの いきがくさいのは、そのせいじゃろう」

それを きいた ネズミたちは、ヤセッポチのことが、

しんぱい になってきました。

ほんとうに、きのうから なにも たべていないなんて。



ヤセッポチを かこむ ネズミたちのわに、
とし
年より ネズミも、くわわります。

「おいっ。おいしい スパゲティー、たべにいこうぜ〜」
フトッチュが、ヤセッポチの ^{みぎて} 右手を ひっぱりました。
「スパゲティーより、なまのさかなは どうですか？」
スキッパーは、^{ひだりて} 左手を ひっぱります。

ガツガツとチュリナも、いいました。
「ねばねばなら、まかせてくれよ」
「あら、お花も ^{はな} いいわよ」

「わしは、チーズが たべたい
のう。チュチュチュ」

おわり